vol.554

“農は農力、情は情熱、情報はマック”
THE MAC JOURNAL
三菱商事アグリサービス株式会社

◆ 2019年11月13日発行ラインナップ
・全国菱肥会海外農業視察
～タイ・カンボジア
・徳島県農産品のご紹介

全国菱肥会海外農業視察

～タイの農協 ・ 精米所視察と世界遺産アンコール遺跡

11月2日～7日に菱肥会会員11名、賛助会員4名、当社2名の計17名にて全国菱肥会海外農業視察がおこなわれタイのラムルッカ農協と精米所を訪問した。先ずは農協のスラチャイ氏より農協やタイ米（長粒米）の状況をお聞きした。タイには75県1郡1特別市毎に農協（3,797農協　08年1月）があり、ラムルッカ農協はバトゥムターニー県にある7農協の一つで40年前に274組合員で設立された。現在、職員数は39名にて2,714組合員に対し肥料・農薬等の生産資材の販売や精米所、金融サービス、アパートメントやガソリンスタンドの経営といった日本の農協とほぼ変わらない活動を行っている。組合員の耕作面積は平均30ライ（約48ha　1ライ＝約16a）。米の2期作を行い（10～12月に機械直播し翌2～4月に機械収穫、4～5月機械直播し8～9月に機械収穫）収量は1作当り精米400kg/ライ（250kg/反　15%水分換算）。かつては3期作もしていたが病気が発生しやすくなったために現在では2期作が定着している。ラムルッカ農協内の1名当たりの組合員の耕作面積は10ライ～2,000ライであるが、タイ国内では3,000ライを生産している農家もいるとの事。訪問時には50kg袋の肥料がトラックで倉庫に納入されており、肥料倉庫も見学することができた。ラムルッカ農協管内では米1作当り肥料を3回施肥している。まず1回目は尿素、2回目には16-20-0、3回目は18-8-8又は16-8-8を各々20kg/ライ散布している。1反当たりに換算した窒素成分施肥量は10kg程度となるものの、タイは気温が高く全て追肥にて表層施肥しているため肥料の利用率は悪いはずなのだが、農家にとって肥料は高価な商品であるために単位面積当たりの施肥量は少なく、収量が上がらない一つの原因ではないかと考えられる。

精米所には200tクラスの乾燥機が5機、日本のサタケ社製精米機が1機設置されていた。残念ながら視察当日は精米機は稼働していなかったのだが、お聞きしたところによると農家が持込んで来る籾の水分値は21～25%範囲のものが多く、例えば出荷量が800kgだとすると水分値を15%程度までに乾燥調整し精米すると精米重として400kgとなる。精米所には冷蔵設備はなく常温（日本に比べるとかなり高温）でのオペレーションがなされていたのには驚いた。今回、バンコク近郊においてタイ米の栽培方法から精米まで学ぶ機会を得る事が出来た。

カンボジアの世界遺産アンコール遺跡にも足を運んだ（右写真）。約1,000年前に建設された寺院で、「アンコール・ワット」はヒンズー教、「アンコール・トム」は仏教の影響が色濃く1982年にユネスコ世界遺産に登録された貴重な遺跡である。初日の「アンコール・トム」では視察中に雨が降りだしてしまいあいにくのスタートとなったが2日目の「アンコール・ワット」では幻想的な日の出を見ることができ、高い文化を持った民族がその歴史や生活様式、そして哲学を石に刻んでおり、ガイドの説明を聞きながらどんどん心が洗われ、強く感動を覚える視察となった。また、結団式での菱肥会全国連合会豊田理事長の挨拶から「ワンチーム」の如く団結し、楽しいひとときを共有できたことは何よりも有意義であった。

徳島県農産品のご紹介

今回、当社特約店の株式会社鶴田利七商店（小松島市）のご協力を頂き、吉野川下流の徳島市川内地区の農家をご紹介頂いたので徳島県の農産品についてご紹介したい。

最初に訪問した先はさつまいもと水稲を栽培している農家、島村佳孝氏。農業に従事して35年のベテランで、島村さんご夫婦とご両親の4名にて営農されている。栽培面積は、さつまいも90a、水稲4haでいもの栽培品種は「なると金時」、水稲は「コシヒカリ」。営農の主力となっているなると金時の作業スケジュールをお聞きすると、2月頃苗を購入し土壌消毒を行い、3～4月頃より元肥でオルガニン2号をN換算で5kg/反を施肥する。同時に苦土質肥料のサンメイトも施しマルチを張って植え付ける。植え付け本数は反当たり平均3,000本。追肥は、植え付け後40～60日過ぎた頃に追肥でオルガニンを2～3袋撒くとの事。川内地区の土壌は砂地、砂でストレスをかけて栽培するやり方で、サンメイト等の苦土質肥料は可食部の根の肥大や食味向上で効果が表れるようだ。近隣農家さんより食味向上の秘訣を尋ねられた際にサンメイトを紹介したところ、消費者に喜ばれたとのうれしいエピソードをお聞きした。収穫は、7月を過ぎてから「さぐり掘り」を行う。さぐり堀りとは、まだ若いいものうちに掘る方法でいもの相場が高い。次いで本格収穫を迎える秋に入ってから「総掘り」を行う。ご当地では全てのいもを11月頃までに取り終える。収穫したいもは、貯蔵庫（平均温度13℃）で保管して都度出荷する。規格は3L～2Sまであり、マーケットはL・Mを好むそうだ。島村氏の平均収穫量は約3.5t/反。2t程度の農家もおり、比較的腕のいい農家と言えそうだが、病害虫対策には頭を悩ませられているとの事。水稲は、コープ（生協）との契約栽培で施肥はノンコーティング一発型の「一輝米進」を使用している。また、一部圃場にて無農薬有機栽培も手掛けている。

いも堀り機

次に訪問したのは、同じく川内地区のれんこん専業農家の松本望氏。栽培面積は4haのうち、1.2haがハウス栽培。ホワイトロータスと言う品種をメインに、茨城県で栽培されている金澄（かなすみ）と言う品種も手掛けている。栽培スケジュールは、2月～3月に種を植え付け石灰窒素を施肥、4月頃より元肥に肥実効222-10号を10袋／反施肥、追肥は大粒肥料を使う。収穫は、8月お盆過ぎから開始して翌年1月頃まで掘り続けるとの事。同時並行的に種用に若芽を摘み、収穫後の圃場に植え付ける。これを収穫して2作分栽培を行うようだ。ハウス栽培の方は、2月頃にビニール張り、3月下旬に圃場を整備して植え付け5月20日頃より収穫を開始し7月10日頃に終了する栽培体系。ハウスの収穫を入れて3作分を耕作されていた。松本さん曰く、れんこん専業農家はこれくらいやらないと経営的に厳しいとの事。作業は一年間に渡っており、徳島市内を離れることは中々出来ないと言う。幸いなことに後継者の息子さんご夫婦が就農されておられ、松本さんご夫婦と合わせ4人で家族経営を行っている。れんこんの相場は以前より下がったが、高級品以外のマーケットが出来て特級品以外も販売することが出来ているので、まずまずとの事。れんこんは傷つくと変色して価格が下がったり、売れなかったりする。収穫は関東と同じ様に水圧を使って掘っているが、関東の様に全て手作業ではなく、機械を使ってある程度浮かせて収穫する方法だそうだ。現在、川内周辺のれんこん農家の悩みは腐敗病が蔓延している事。色々対策を試しているが、どれもなかなか効果が上がらなく原因がつかめていないらしい。また、れんこん農家に限ったことではないが、周辺農家は高齢化しており、どんどん離農して行く現状がある。松本さんも受託しているが、厄介なのが腐敗病に侵されている圃場を引き受けた場合だ。収穫量は少なく選別の手間もかかり割に合わないようだ。しかし、Aさんの圃場は受けるがBさんは受けないというのも言い出せないので、後継者のいる農家ならではの悩みもあるとの事。

最後に、徳島県の観光といえば鳴門の渦潮と阿波踊り、NHK紅白歌合戦で同県出身の米津玄師が歌った場所は大塚国際美術館。是非、徳島に遊びに来て頂ければ幸いです。ご協力頂きました、鶴田利七商店の鎌田部長様に御礼申し上げます。（大阪支店）

朝晩は一段と冷え込むようになってきましたね。インフルエンザが例年よりも早く流行の兆しだそうです。マスク、うがい、手洗いの励行でご注意くださいませ。　　編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail： macjournal@mcagri.co.jp　URL http://www.mcagri.jp